

# 結婚から独立する恋愛

—恋愛ドラマから見る恋愛観と結婚観の変遷—

河 本 彩

## 1 はじめに

2015年に行われた出生動向基本調査によれば、18～34歳の未婚者のうち「交際している異性はいない」と回答した未婚者の割合は男性69.8%、女性59.1%と、いずれも2010年の調査から10%近くも上昇している（アクセス2020/11/30）。さらに、男女ともに「一生結婚するつもりはない」と答える未婚者の微増傾向が続いている。2020年9月20日には、内閣府は少子化対策の一環として、新婚世帯の家賃や敷金・礼金、引っ越し代など新生活にかかる費用について、2021年度から60万円を上限に補助する方針を固めた。婚姻率の低下が社会問題となるほどに、人々の結婚に対する優先度が下がり続けているのだ。恋愛と結婚には深い繋がりがあることが共通認識とされているが、若者の恋愛離れと婚姻率の低下はどのような関係にあるのだろうか。その関係性を探るため、恋愛と結婚の実態について捉え直す必要があると考える。以上の社会の意識変化を踏まえ、結婚における恋愛の立ち位置が時代によってどのように変化してきたのかを、結婚観の構成要素としての恋愛に焦点を当てて考察していきたい。

本研究では、現代における結婚の目的について考察し、結婚観を形成する上で恋愛がどのように作用してきたのかを明確化する。まず、恋愛と結婚の関係性について探るため、日本における恋愛及び結婚の歴史を追う。さらに、時代の世相を反映しているという理由から、日本国内で放送された恋愛ドラマを用いてその変遷を説明する。

---

\* 社会科学総合学術院 花光里香教授の指導の下に作成された。

## 2 恋愛・結婚とは

### 2-1 恋愛の歴史

ここでは、日本における恋愛の歴史を追う。

古代日本の女性は、みな神に奉仕する資格を持っていた。魏志倭人伝によると、卑弥呼は年長く夫婿を持たなかったと言われている。ただし、一生を祖霊に仕えるべく運命づけられた聖女は、皇室をはじめ諸々の氏族に多かった。他方で、聖女にふさわしい資格や運命から退いた女性たちには、奔放自由な愛欲の世界があった。婚姻形態は一夫多妻的な傾向を生じ、特に有力な男性は数多くの女性を妻とした。言い換えると、男性が女性の愛を勝ち取るには、多くの試練をくぐり抜けなければならなかったのである。この試練は竹取物語のように、相手の女性から提示されることもあった（赤松, 1950）。

奈良朝時代、万葉の女性たちは澁刺として自由と恋愛を楽しんでいた。当時、母権的な風俗が残っており、親から生活には困らないだけの財産を男の兄弟と同じように分けてもらえたからだ。結婚しても婿の方から毎晩通ってきてくれるため、二者間に本当の恋愛が生まれなければ関係性は続かない。互いに別れてしまえばそれまでであり、離別も現代のように難しくなかったため、一見多情多感なようであるが、自分の心を偽る必要もなかった。故に、男女とも恋愛に誠実であり、真剣であったといえる（赤松, 1950）。

平安時代、宮廷では恋愛は日常の遊戯であった。藤原氏による政権の独占が成就すると、子女を後宮に入れ、外戚などと競うために恋愛に奮起していた。子女の入内に際して駆り集められたのが女房達であり、当時の女子にとっても家庭以外の生活場所が新しく開かれたこともあって、互いに大きな刺激となった（赤松, 1950）。

鎌倉から江戸に至る長い封建時代は、上級階級の若者たちの恋愛にとって暗黒の世界であった。武家社会で嫁入り婚が当たり前になり、所領が婿となることによって、家父長制が強化された。女性には献身的な隷属と奉仕の思想が強調され、結婚は家と家との結合の社会的象徴であり、自由な愛情による結合はかえって非社会的なものとして指揮された。一方で、領主や上級の武士たちに政略結婚の犠牲はあっても、下層の武士や農民の娘たちは、かえって自由な恋愛を楽しんでいたとされている（赤松, 1950）。

近世では、士農工商の身分制度が確立し、封建制度において家の維持が全目的とされていた。そのような世の中において、女子の法制的地位は低劣であり、妻の浮気は殺されても文句は言えない一方で、男は妾を抱えることも、遊里へ行くことも自由であった（赤松, 1950）。

近代、結婚は家を離れ、恋愛は個人の責任に委ねられているように見える。しかし、法的に保障されたということが、そのまま現実になったとはいえない（赤松, 1950）。

上記に説明した通り、現在でも身分制度や家制度などの名残から、本当に自由な恋愛を

達成するには難しい状況にあるといえる。

## 2-2 結婚の歴史

ここでは、社会規範となり、人々の意識に大きく影響を与えた社会的慣習及び、民法上の「婚姻」の歴史を追う。

8世紀頃までは、庶民では生活共同体としてのまとまりを持った家族は、明確な集団としての把握ができない。別居の通い婚が多く、夫婦関係は流動的で、村や親族のつながりが大きな意味をもち、家族が経済単位として自立できる段階にはなかったからである（義江・伊集院, 2013）。

飛鳥・奈良朝になると、儀式に唐の習慣が取り入れられるようになった。戸令によると、結婚は男が15歳、女が13歳で許されていた。その他、16歳以下の男および夫のいない女性を戸主とする戸の新設は認めないこと、異なる身分間での婚姻を禁止することなどが規定されている。当時は別居婚が通例とされていた（義江・伊集院, 2013）。

平安時代には、男性が女性の家を訪ね、婚姻を認められればその女性の家に通うことができるという「婿取り婚」の形が取られていた。この「婿取り」は「婿入り」とは別の意味であり、婿入りの方は婿養子となるが、婿取りは娘の家へ男性が来て婚儀を整えるだけで、家つき娘の婿養子になるのではない。この風習は、王朝時代から鎌倉時代に移っても同様であった。源頼朝が北条時政の娘政子と結婚し、その家に迎えられているのもそうした習慣の影響がある（林, 2001）。

戦国時代から江戸時代になると、武家社会では、お互いの領地を侵略しないために政略結婚がさかんに行われる。男性は自分の領地を離れるわけにはいかないため、自然と男性の家に女性が嫁ぐ嫁入り婚の形が取られるようになった。このころから婚礼といえずすべてが嫁迎えを意味し、婿取りとは婿養子の意味に変わった。その後、武家社会のしきたりが一般庶民にも広がっていく形で嫁入り婚が通例となっていく（林, 2001）。

明治民法では、婚姻適齢は男が17歳、女が15歳であった。旧14条～18条によると、女は婚姻によって無能力者となる。たとえ女が婚姻前は成年として能力者であっても、妻となると無能力者となってしまう、重要な法律行為をするには、常に夫の同意を得なければならない。旧778条には婚姻によって妻は夫の家に入ることが定められていたため、妻は氏を夫の家の氏に変更し、戸主と夫の支配と庇護の下に入るとされていた。現行民法では、「夫婦は、婚姻の際に定めるところに従い、夫又は妻の氏を称する」と改正されているが、この慣習を受け、実際は妻が夫の氏に変更することがほとんどである（加茂山, 2002）。

大正時代になると、西洋の文化が取り入れられ、自由恋愛も盛んとなる。昭和22年、日本国憲法の基本原理に基づいた改正が行われた。家・戸主の廃止、家督相続の廃止と均

分相続の確立、婚姻・親族・相続などにおける女性の地位向上などが改正の主な内容となった（国立公文書館ホームページ，アクセス 2020/11/30）。

近年では、1950 年以降 10 年ごとの推移で見ると、離婚件数は上昇傾向にあり（厚生労働省，2009，アクセス 2020/12/18）、再婚件数も 1980 年以降同様に上昇している傾向がみられる（厚生労働省，2016，アクセス 2020/12/18）。さらに、結婚の形態も婚姻という法律婚の形式だけではない。夫婦別姓を望むカップルや、パートナーシップ制度の設置などの観点から、事実婚や同性婚なども結婚の一形態として存在をしている。現在は、結婚は男女本人の合意の下で成立する形が通例とされているが、その主体は時代や身分によって大きく変化してきたことが分かる。

### 3 恋愛ドラマから見る恋愛と結婚の変遷

#### 3-1 研究手順

ここでは、現代の恋愛観と結婚観を形成してきた社会的背景及び流行などを探るため、ビデオリサーチ社の記録に基づき、年代ごとに高視聴率恋愛ドラマを抽出していく。各年代の恋愛ドラマのあらすじなどを参考の上、特徴を書き出し、過去の論文や先行研究を交えながら当時の恋愛観・結婚観について考察する。

#### 3-2 検討資料の意義

時代の流れを追う分析素材として「恋愛ドラマ」を採用する。その意義として、西別府・岩男（2006）の研究を挙げる。この研究では、1977 年から 2004 年の計 8 回にわたってキー局の対象期間のテレビドラマをすべて録画視聴し、必要に応じてテープを止めたり、巻き戻したりしながらストップウォッチで持続時間を計り、該当事項のコーディングを行うという方法で内容分析が行われた。西別府・岩男（2006）は、テレビドラマはその時代の社会問題や関心事がテーマになるなど、『時代』と密接に関わり、時代を反映する興味深い研究対象である」（p. 80）ととらえている。さらに、中村（2011）は、携帯電話のディスプレイを見る行為の増加傾向を証明するために恋愛ドラマを活用することについて、「恋愛ドラマは、同時代を生きる人にとって、あり得そうな身近な話題として呈示される。そして、その物語の構成は、放映当時のリアルタイムの世相や風潮を反映すると共に、描写される主人公たちのライフスタイルが、多くの視聴者のそれと等しい必要がある。それらの描写を行うためには、物語の背景に映り込む人々（つまり、エキストラ）や街並みにおいても、現実的で日常的であることが求められる。」（p. 61）として、恋愛ドラマを資料とすることの意義を語っている。その他先行研究として、朝日新聞（1997）は、新聞記事にみる結婚と恋愛として、明治時代から大正時代にかけて発行された結婚と恋愛

に関する新聞記事の抽出を行った。さらに、太田（2020）は、雑誌『an-an』において、時代の変化と共に恋愛観、結婚観がどのように変化したのかを分析している。恋愛観・結婚観については、その興味・関心の大きさから多くの研究がなされてきているが、今回はより現実的な世相の反映を狙い、西別府・岩男と中村の研究を参考とする。歴代の高視聴率テレビドラマ、特に恋愛を中心として取り上げている番組に着目して、日本人の恋愛観や結婚意識の変遷を追う。

### 3-3 研究内容と考察

恋愛ドラマの定義としては、中村（2011）が『恋愛ドラマとケータイのコミュニケーション論』で記している「恋愛を通じた人間関係の在り方、恋の成熟（または破局）、結婚への道程（または破断）などが主なテーマとなっているものを指す。明瞭な分類基準はないが、一般的な学園ドラマ、刑事ドラマ、推理ドラマ、医療ドラマとみなされるものは含まない。」（p. 61）に則り、ビデオリサーチ社が提供する「ドラマ高世帯視聴率番組（1977年～）」から10年ごとの恋愛ドラマを抜粋した（アクセス2020/11/8）。ただし、恋愛要素が強くみられる学園ドラマは本稿に含めている。その上で、各年代の代表的な恋愛ドラマを以下の表にまとめた。

#### 3-3-1 1970年代に見られる特徴

それまではサスペンスや家族ドラマに恋愛要素はあったものの、恋愛ドラマと呼べる作品が誕生したのは80年代からである。脚本家の鎌田敏夫も、インタビューでは自身が手掛けた『男女7人夏物語』まで純粋な恋愛ドラマはなかったと発言している（ブルータス、2020）。数少ない恋愛の描写を含むテレビドラマの中でも、恋愛要素が色濃く現れていた作品が1977年に放送された『赤い激流』である。作品内では、最終回、主人公はヒロインに対し、「結婚できない」と言って別れを告げていることから、この時代には恋愛と結婚が深く結びついていたと解釈できる。

内閣府（2020）によると、1972年には、日本国内において過去最高の婚姻件数を記録している（アクセス2020/11/30）。結婚は恋愛の結果であり、結婚に結びつく正しい恋愛が真面目な恋愛（谷本、2008）とされていた。つまり、「恋愛結婚は声に出して言いにくい時代」（牛窪、2009、p. 35）であり、結婚に至らない恋愛は「不潔」「真剣でない」「罪」（谷本・渡邊、2019、p. 58）といった認識であったのだ。

1970年代は、結婚に至らない恋愛はタブーとされていたことが分かる。結婚は一家繁栄のための義務であり、公に自由な恋愛をすることは許されない風潮であった。

表1 歴代高視聴率恋愛ドラマ

放送年	ドラマタイトル
1970年代	赤い激流（'77）
1980年代	男女7人秋物語（'87） 愛しあってるかい！（'89）
1990年代	101回目のプロポーズ（'91） ずっとあなたが好きだった（'92） 愛してると言ってくれ（'95） ラブジェネレーション（'97） バージンロード（'97） 失楽園（'97） 眠れる森（'98） 神様、もう少しだけ（'98）
2000年代	ビューティフルライフ（'00） やまとなでしこ（'00） 空から降る一億の星（'02） 電車男（'05） 花より男子2（'07）
2010年代	ラストクリスマス（'11）

（ビデオリサーチホームページ『ドラマ高世帯視聴率番組』に基づき作成）

### 3-3-2 1980年代に見られる特徴

1980年代の代表作として『男女7人秋物語』、『愛しあってるかい！』などが挙げられる。それぞれの作品に結婚の描写はほとんど見られず、集団恋愛や、ウォーターフロントを舞台にしたきらびやかな恋模様が描かれている。『男女7人秋物語』の冒頭では、ヒロインが昨日の記憶がないまま、朝起きたら主人公の男性の家に行ったというシーンから始まる。自由恋愛が認められるどころか、恋愛至上主義と言えるような描写が目立っていた。

当時は実際に6～7割の男女に彼氏・彼女がおり、「サークル活動よりも彼氏とのデートが優先」（牛窪, 2015, p. 57）されていた。一方で、厚生労働白書（2013）のアンケートによると、1980年代は、「人は結婚するのが当たり前だ（61.9%）」が、「必ずしも結婚する必要はない（34.3%）」を大きく上回っている（アクセス2020/11/30）。このことから、結婚に対して迷いを感じる女性は少なかった（太田, 2020）ことが分かる。

1980年代は、恋愛を大いに楽しんでいたことが読み取れる。結婚には義務感はあるものの、恋愛の延長に存在することが理想とされていた。

### 3-3-3 1990年代に見られる特徴

1990年代の代表作として、『101回目のプロポーズ』、『失楽園』などが挙げられる。表1からも読み取れるが、この年代は恋愛ドラマが軒並み高視聴率を獲得しており、恋愛ドラマ全盛期であった。『101回目のプロポーズ』では、主人公の武田鉄矢とヒロインの浅野温子の不釣り合いな恋模様が描かれており、最終的には愛で結ばれる。『失楽園』は、家庭よりも恋愛を優先させる内容であった。恋愛が絶大な力を持つストーリーが特徴だといえる。

当時、メディアにおいても結婚に関する雑誌記事が激減し、魅力やアプローチに関する記事が増えている（谷本, 2008）。恋愛の延長線上に結婚があるべきだとするロマンティッ

ク・ラブ・イデオロギーの消失を唱える研究者が多く、「結婚に至らなくとも『気が合う』『楽しく過ごせる』関係であれば、それでよい」（谷本・渡邊, 2019, p. 58）という考え方がされるようになった。

1990年代は、1対1の恋愛に情熱を注いでいる。恋愛の延長に結婚が存在することが必須とされるが、結婚は義務ではなく、人生における一つの選択肢となった。

#### 3-3-4 2000年代に見られる特徴

2000年代の代表作として、『やまとなでしこ』、『電車男』などが挙げられる。『やまとなでしこ』では、結婚しなければいけないという圧力に対し、女性の裏表や本音を赤裸々に告白するような場面が目立った。『電車男』においても、今までの恋愛ドラマに見られる理想の男性像を体現したような役者を起用するのではなく、何でもインターネットに頼る冴えないオタクが恋に試行錯誤する姿が話題を呼んだ。いずれも従来の作品に多く見られる王道の美男美女ではない、クセのある人物がリアルな現状を暴露する形となっている。また、合コン文化やインターネットの台頭から、「“恋愛力”がなくても条件を満たせば結婚できる時代」（牛窪, 2009, p. 5）に突入したと言われている。

読売新聞（2008）による調査では、当時「女性は結婚しなくても幸せな人生を送ることができる」と答えた男女が55%と過半数を超えた（アクセス2020/11/30）。谷本・渡邊（2019）は、このような傾向について、ロマンティック・ラブ・イデオロギーではなく、ロマンティック・マリッジ・イデオロギーが見いだせると解釈している。ロマンティック・マリッジ・イデオロギーとは、恋愛は結婚に繋がる必要はないが、結婚するには恋愛感情がなくてはならないという考え方である。恋愛のゴールは結婚でなくてもよいということは、結婚に至らない恋愛も自由にできると解釈できる。

2000年代は、恋愛する相手がいると安心材料になるが、いなくとも問題は生じない。結婚に対しては「いつかは」「できれば」といった、可能性の要素が強いことが分かる。

#### 3-3-5 2010年代に見られる特徴

2010年代の代表作には『ラストクリスマス』を挙げているが、2000年代以降、恋愛ドラマ自体が高視聴率番組としてランクインしていない。『ラストクリスマス』では、男をまたにかけるヒロインの裏事情として病気が原因での離婚経験や、主人公の現在の彼女と元婚約者の女性の居合わせ、さらには元婚約者の子供を預かるといった生々しいシーンが堂々と描かれている。後述するが、2010年以降の作品には、登場人物が等身大で現実と向き合い、恋愛・結婚そのものを見つめ直す作品が多く存在している。

厚生労働省（2017）によると、2010年以降50歳時点で結婚経験の無い人の割合を示す生涯未婚率（50歳時未婚割合）は男女ともに上昇し続けている（アクセス2020/11/30）。「恋

愛は遊びや買い物感覚であり、恋人以上に大切な存在や男と女を超えるような友情を目指すこともできる」(谷本, 2008, p. 18) という若者の認識を「恋愛の趣味化」(牛窪, 2009, p. 15) と表現されることもある。また、牛窪は恋愛意欲と景気の関係性についても指摘している。新入社員の男女に「デートの約束があるときに残業を命じられたら？」と聞いた財団法人社会経済生産性本部(2007)による調査の結果では、「デートを選ぶ」と答えた男女が最も多かったのは、バブル期の90~91年であり、その後は一転して減少している。2007年の段階ではデートを選ぶ人はバブル期の半分以下、2割弱しかいない。終身雇用が原則だった日本においても成果主義が徐々に導入され、90年代半ば以降、リストラや派遣社員の増加が目立った。働き方の変化も人々の恋愛意識に大きく影響を与えている。

2010年代以降、恋愛はあくまで自己形成の一つであり、たとえ恋愛しなくとも充実した生活を送ることが共通認識となりつつある。結婚も同様に、していなくとも安定して生きられるがゆえに、最初から選択肢に無くても不思議ではない。

### 3-4 鑑賞媒体の多様化

本節では、テレビドラマの視聴率調査が始まった1970年代から現代までの恋愛ドラマを分析することによって、当時の恋愛や結婚に対する人々の傾向を考察してきた。一方で、恋愛ドラマを資料とするにあたり、時代が進むにつれて増加しているテレビ離れも考慮しなければならない。つまり、テレビ以外のドラマ視聴媒体の多様化によって、ビデオリサーチ社が提供しているテレビ所有世帯のうち、どのくらいの世帯がテレビをつけていたかを示す世帯視聴率には表れない潜在的な恋愛ドラマ視聴者が存在しているはずだ。2010年代以降、ランキングに反映されていなくとも、社会現象となった作品が数多くある。例えば、2016年に新垣結衣と星野源によりドラマ化され話題となった『逃げるは恥だが役に立つ』では、就職としての結婚という社会的常識に縛られない自分なりの関係性を探っていく姿が印象的であった。その他、田中圭主演により2シーズンにわたって放送された『おっさんずラブ』は、男女の恋愛と同様に男性同士の恋愛模様が描かれており、映画化に至るまで多くの支持者を得た。

現代の媒体の多様化も含む恋愛ドラマの変遷を辿ることで、年代が進むにつれて、恋愛や結婚形態の幅が広がっていることが分かる。恋愛及び結婚を選択する主体が社会から家族、個人へと委ねられるように変化しているのだと考える。

## 4 結婚の目的

結婚の歴史や恋愛ドラマの変遷から、現代の恋愛は多様化していることが分かった。以前に比べ、結婚しないという選択が社会一般的に認められる風潮がある中、結婚したくな

い人は増加傾向にある。2019年のNHKによる意識調査では、結婚することについて「必ずしもする必要はない」と考える人は、調査を始めた1993年には51%と半数程度だったが、長期的に増加する傾向にある。最近の5年間でも2013年の63%から増加し、68%となっているのだ。「結婚するのが当たり前だ」と考える人は現在27%で、1993年の45%から減少を続けている。牛窪（2009）は、「出生率が4人を超えていた当時、結婚の先には『出産』という必然性があった。」（p.39）と指摘している。結婚は、一家繁栄のために必要な跡取りや労働力を確保するべくシステム化されていた。結婚が制度であるという認識には、谷本（2008）も同様の指摘をしている。そのような世の中で、人は一体何のために恋愛をし、結婚をするのかについて、経済的な理由と精神的な理由の二つの側面から考える。

#### 4-1 経済的利益

結婚をする理由の一つに、経済的側面が挙げられる。婚姻によって、配偶者控除などの税制関係での優遇措置や相続財産分与などの法律上の保障を得ることができる。また、民間生命保険の死亡保険金受取やパートナーに対する医療行為の代諾も可能となる。ただし、2020年現在、同性のカップルには、婚姻届けを受理されたカップルが受けられるほぼ全ての権利が認められていない。

#### 4-2 精神的利益

もう一つには、精神的側面が挙げられる。結婚がゴールインなどと表現されることがあるように、結婚が二者間の愛情の最上級の形であると考える人も少なくないと推測される。第一生命経済研究所が行った2006年の調査では、現在の配偶者と結婚した理由を複数回答で尋ねた結果、全体では、「人生の伴侶だと感じた」（48.6%）が最も多く、次いで、「お互いの愛情が確認できた」（43.2%）、「一緒に暮らしたいと思った」（40.5%）になった（アクセス2020/11/30）。年代別でみると、若い年代ほど「お互いの愛情が確認できた」や「一緒に暮らしたいと思った」などの感情的な理由が多くなる一方で、「適齢期になった」や「社会的信頼を得たいと思った」などの周囲を意識した理由は、年代が上がるほど多くなっている。年代によって差異はあるものの、結婚をすることで精神的な安心感を得られることが読み取れる。

#### 4-3 結婚の所在

雑誌『BRUTUS』（2020）の対談の中で、社会学者の古市憲寿は、「別に結婚をしなくても家族を作らなくても生きていけるとなれば、そもそも恋なんてしなくてもいい、とみんなが思っていく可能性がある」（p.75）と語っている。それに対し、社会学者の上野千鶴子

は、家族レスやセックスレスになっても社会がセーフティネットを提供してくれれば、結婚と家族に対するニーズはなくなるかもしれないが、恋については、相手を丸ごと受け入れたいという欲望はどんな制度によっても担保されない欲求であるため、一緒になくなることはない指摘している。

以上から、結婚はその時々自分の状況によって、経済的にも精神的にも利益が生じるのであれば活用すべき制度であることが考えられる。

## 5 おわりに

本稿では、現代における恋愛観及び結婚観について、日本社会の変化を追うとともに考察してきた。日本の歴史において、恋愛は時代背景によって、感情の赴くままに自由奔放なものから将来を意識した関係性まで、様々な特徴がみられる。結婚は村や親族のつながりなどの大きな単位による決定から、家族を守るための政略結婚を経て序列や身分制度を重んじるようになり、現在では同性婚や事実婚などのように多様化している。さらに、恋愛テレビドラマの変遷を追うことにより、当時の社会的背景や流行などの側面から恋愛観及び結婚観の変化の模様を見てきた。現行憲法に基づく婚姻はあくまで契約であり、制度に過ぎない。従って、消滅する可能性は十分に考えられる。一方、恋愛は複雑であり、システム化できる概念ではなく、単純に利益不利益で割り切れない人間の本能的欲求に位置している。

世間一般には、いずれは経験することが理想とされている結婚という最終目標を達成するために、人々は恋愛をするのだと思われることが多い。しかし、本研究を通して、実際にはそうではない選択肢の存在も見えてきた。結婚は安心・出産・介護・ジェンダーなどの精神的側面、社会保障や財力などの経済的側面での影響を考慮し、都合の良い人だけが利用すべきのものであって、必ずしも恋愛は結婚と結び付ける必要はない。つまり、かつては合理的な子孫形成や労働力確保のために制度化され、半ば強制力を持つ結婚を目指すまでの恋愛とされていたが、現代は結婚と切り離された本来の意味での恋愛が強く意識されているという考え方ができる。社会の慣習に囚われ、自分の生きやすさを見失う前に、選択肢の一つとして結婚を捉え直してみたい。

さらに、最近ではアンドロイドやアニメキャラクターなど、人間以外に対しての恋愛感情が認められる場合もある。これは、恋愛及び結婚の主体が、社会的抑圧から解放され、個人の価値観に基づくものになっている傾向の表れだと考えられる。

恋愛、結婚の形は日々変化を遂げているが、自由恋愛においても、結婚が恋愛のゴールなどといった固定概念が完全に払拭されることはないだろう。しかし、今回の研究によって、恋愛と結婚の分離、さらには恋愛及び結婚する主体の社会の目からの独立化が進んで

いることが分かった。これからも、恋愛や結婚に対する社会の考え方は変化し続けていくことが推測される。今後は、テレビドラマなど様々なメディアや社会の出来事から時代の変化を肌で感じ、結婚観のさらなる変化や、それに起因する恋愛観との関連を明らかにしていくことで、自分なりの答えを自らの人生で体現していきたい。

## 引用文献

- [1] 赤松啓介 (1950) 『結婚と恋愛の歴史』, 三一書房
- [2] 朝日新聞社 (1997) 『朝日新聞の記事にみる恋愛と結婚 明治・大正』, 朝日新聞社
- [3] 牛窪恵 (2009) 『「エコ恋愛」婚の時代 リスクを避ける男と女』, 光文社
- [4] 牛窪恵 (2015) 『恋愛しない若者たち コンビニ化する性とコスパ化する結婚』, 鷗来堂
- [5] NHK 放送文化研究所 (2019) 『45年 で日本人はどう変わったか (1) 第10回 「日本人の意識」調査から』 [https://www.nhk.or.jp/bunken/research/yoron/pdf/20190501\\_7.pdf](https://www.nhk.or.jp/bunken/research/yoron/pdf/20190501_7.pdf) (アクセス 2020/12/18)
- [6] 太田詠美 (2020) 「女性の恋愛観・結婚観の変化: ファッション雑誌『an・an』の分析」『論文集 / 金沢大学人間社会学域経済学類社会言語学演習 [編]』
- [7] 加賀山茂 (2002) 『日本の家族と民法』, 名古屋大学
- [8] 厚生労働省 (2009) 『人口動態統計特殊報告「離婚に関する統計」の概況』 <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/tokusyu/rikon10/01.html> (アクセス 2020/12/18)
- [9] 厚生労働省 (2013) 『厚生労働白書 若者の意識を探る』 <https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/13/dl/1-02-2.pdf> (アクセス 2020/11/30)
- [10] 厚生労働省 (2016) 『人口動態統計特殊報告「婚姻に関する統計」の概況』 <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/tokusyu/konin16/dl/gaikyo.pdf> (アクセス 2020/12/18)
- [11] 厚生労働省 (2017) 『厚生労働白書 社会保障と経済成長』 <https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/17/index.html> (アクセス 2020/11/30)
- [12] 国立公文書館ホームページ『日本のあゆみ』 [http://www.archives.go.jp/ayumi/kobetsu/s22\\_1947\\_08.html](http://www.archives.go.jp/ayumi/kobetsu/s22_1947_08.html) (アクセス 2020/11/30)
- [13] 国立社会保障・人口問題研究所『現代日本の結婚と出産—第15回出生動向基本調査(独身者調査ならびに夫婦調査)報告書—』 [http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou15/doukou15\\_gaiyo.asp](http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou15/doukou15_gaiyo.asp) (アクセス 2020/11/30)
- [14] 財団法人社会経済生産性本部 (2007) 『新入社員「働くことの意識」調査』
- [15] 第一生命経済研究所 (2006) 『結婚生活に関するアンケート調査』 <http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/ldi/news/news0607.pdf> (アクセス 2020/11/30)
- [16] 谷本奈穂 (2008) 『恋愛の社会学』, 青弓社
- [17] 谷本奈穂・渡邊大輔 (2019) 『変貌する恋愛と結婚 データで読む平成』小林盾・川端建嗣(編)第3章, 新曜社
- [18] プルータス (2020) 『恋と、ドラマ』, マガジンハウス
- [19] プルータス (2020) 『恋と、エゴイズム』, マガジンハウス
- [20] 内閣府 (2020) 『少子化社会対策白書 3 婚姻・出産の状況』 <https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w-2019/r01pdfhonpen/pdf/s1-3.pdf> (アクセス 2020/11/30)
- [21] 中村隆志 (2011) 「恋愛ドラマとケータイのコミュニケーション論: 恋愛ドラマの背景に映り込む『ケータイのディスプレイを見る行為』」『情報文化学会誌』
- [22] 西別府厚子・岩男壽美子 (2006) 「テレビドラマの社会心理学的研究: 内容分析を中心として」『武蔵工業大学環境情報学部紀要』
- [23] 林美一 (2001) 『時代風俗考証事典』, 河出書房新社
- [24] ビデオリサーチホームページ『ドラマ高世帯視聴率番組』 [https://www.videor.co.jp/tvrating/past\\_tvrating/drama/01/post-2.html](https://www.videor.co.jp/tvrating/past_tvrating/drama/01/post-2.html) (アクセス 2020/11/8)

- [25] 義江明子・伊集院葉子・Joan R. Piggott (2013) 「日本令にみるジェンダー—その(1) 戸令— Gender in the Japanese Administrative Code Part 1: Laws on Residence Units」『帝京史学』
- [26] 読売新聞 (2008) 『連続世論調査～結婚観』 <https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/research/h26/zentai-pdf/index.html> (アクセス 2020/11/30)